

『一生を賭ける仕事の見つけ方』

斎藤祐馬 著 ダイヤモンド社 1,500円(本体)

同世代の挑戦に刺激を受ける

会員 竹花 元 (62期)



1 トーマツベンチャーサポート (TVS) の斎藤祐馬氏の著書である。

私と同世代の公認会計士である斎藤氏が所属するTVSは、監査法人トーマツのグループ法人で、ベンチャー支援を専門に行っている。

斎藤氏とは、6年前に友人である日経新聞記者の紹介で、渋谷のワインバーで出会った。当時、休眠状態だったTVSを2010年に再始動させて、これからベンチャーと大企業・投資家・メディアを繋げて、日本を変えようとしていた頃だ。ワインバーで激論を交わす記者と斎藤氏。当時の私は「スタートアップ?」「ベンチャーのエコシステム?」すらピンとこない状況であったが、斎藤氏の話の熱量に圧倒され、斎藤氏の仕事に強い興味を抱き、その後何度も一緒に過ごす機会をもつことができた。

2 ライブドア・ショックがあった2006年を境に景気は冷え込み、2006年に114社だった東証への新規上場社数は、2009年に23社まで落ち込んだ。

しかし、斎藤氏と初めて出会ってからの6年間でベンチャー支援をめぐる日本の環境は大きく変わった。連日のように全国紙がベンチャーの新しいサービスを紹介したり、ベンチャーと大企業の協業のニュースを報じている。また、大企業がこぞってVCを立ち上げて、投資先を探している。

ベンチャー企業の成功事例が増え、そこに関与した経営者が投資家や助言者として後発ベンチャーの成功を支援する……そのようにヒトとカネが自律的に回るエコシステム(生態系)ができつつあるのではないだろうか。

ここ数年のベンチャー界隈は「活況」といえると思われる。そして、斎藤氏は、間違いなくその立役者の一人である。

3 公認会計士の主な仕事は、一般的に会計監査や

IPO支援業務とされているから、対象は一定の規模感を持った企業であることが多い。ところが、斎藤氏は立ち上げ間もないスタートアップの支援を志し、ベンチャー経営者の参謀となるべく公認会計士となった。従来の公認会計士の枠には収まらない「ベンチャー支援」という活動に対して当初はトーマツ内でも理解を得られず、逆風も吹いたが、一つ一つ壁を越えて、社内外に仲間を増やしたという。現在はTVSの事業統括本部長として、約150人のメンバーとともに、数千社を超える企業を支援している。

斎藤氏の行動で特筆すべきは、その実行力と巻き込み力である。

たとえば、2013年4月には、ベンチャーと大企業を繋げる場として「モーニングピッチ」を立ち上げた。モーニングピッチとは、毎週木曜の午前7時から開催している、ベンチャー企業と大企業の事業提携を生み出すことを目的としたピッチ(短時間のプレゼンテーション)イベントで、毎週5社のベンチャー企業が、大企業・ベンチャーキャピタル・メディア等約100名に対しピッチを行う。モーニングピッチで知り合ったベンチャーと大企業が業務提携をしたり、M&Aをすることがニュースになることもある。

モーニングピッチを軌道に乗せつつ、後輩を育てて自分がいなくても動く仕組みを作り、また新しいことにチャレンジしていくことで、ベンチャー支援の活動領域をどんどん広げている。

4 斎藤氏に会ったことがある方であれば、あの声が脳内再生されながら一気に読了できる本書。そして、いつもながら高い熱量を感じる言葉の数々。そんな斎藤氏が、一会計士の枠を越えて、一社内起業家として、ベンチャーのエコシステムをどのように構築したか、そこに至る試行錯誤の過程が惜しみなく語られている。

弁護士が新しい領域に挑戦するときにも示唆を与えてくれるであろう一冊として推薦したい。